

# 伝統のまつり 次の主役はあたしたち

伝統文化こども教室 「さづかわ祭り教室」



令和5年最初の教室で  
衣装を着た子どもたち

伝統文化こども教室「さづかわ祭り教室」は、幸津川町に伝わる「すし切り祭り」の祭りを学び、受け継いでいこうとする子どもたちのための教室です。

## 祭りは「コミュニティ」の中心 子ども「好き」が継承の鍵

幸津川町の下新川神社では、毎年5月5日に住民たちの手で脈々と受け継がれてきた「すし切り祭り」が営まれています。拝殿前で神姿の若衆が鮎（あしな）を切り分ける「すし切り神事」が有名です。祭り全体では、宮中の太鼓渡（みこしとぎま）や、神輿（みこし）の舞、長刀振り（ながやぶ）と多くの神事や行事があり、その一つ一つが地元で大切にされています。

幸津川伝統文化保存会（伊藤五作会長）によれば、町の人口は267世帯763人（令和4年11月末現在）で、600年以上続く祭りを住民の手で脈々と受け継いできましたが、高齢化やライフスタイルの変化、子どもの数も減って、祭りの伝統を守り続けられるかどうかの不安も大きいといわれています。

## 祭りの成功体験は 郷土愛と自信を育てる

教室では、もっかのところ、長刀踊りの復活をめざした練習をしたり、祭りを記録したDVDを観賞して地域の祭りに親しんだりしています。

長刀踊りは「近江ケンケト祭り長刀振り」の一つとして、国重要無形民俗文化財にもなっている祭りの花形ですが、約50年前

からは衣装を着て参加するだけで、踊らなくなってしまったそうです。自分から「祭りに出たい」という子どもが減ってしまったのが最大の原因。両親や大人がお願いして参加してもらったのでは踊りの練習などできませんし、子どもが減って「ベビーカーの赤ちゃん」が長刀振りの役になったこともありました。

森田さんは「子どものころは、まだ地域の子どもの多くが花形の大役は長男がする」という不文律もある時代でした。私は次男なので兄をうらやましく見ているんです。だから祭礼そのものへの執着というより、地域の歴史や伝統をこれからも大事にしたいという気持ちが強いです。それと同時に、祭礼に参加して大勢の前で長刀踊りを披露する経験は、子どもたちに地域への愛と大きな自信を育ててくれると思います」と話していました。

## 地域ぐるみでサポート 長刀踊りの復活へ

同じケンケト祭り長刀振りを継承する小津神社の「長刀まつり」を習いに行ったり、映像を借りたりして学び、教室で教えています。子どもたちは長刀を回

したり、またいで跳んだり、何度も失敗しながら練習に励んできました。

昨年11月、下新川神社の祭礼「長刀振り」「かんの舞」が、「風流踊」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されました（小津神社の長刀まつりなどを含む近江ケンケト祭りとして）。メディアもお祝いムードですが、保存会は「世界に認められてうれしい反面、ごく責任が重いと話していました。」

コロナ禍で中止になったり集まる子どもが少なかったり、思うように開催できない中でも、保存会や祭礼に関わる大人、青年団の人たちもできる範囲で参加して、教室と子どもたちのサポートをしてきました。教室に参加する子どもたちを中心に、地域ぐるみで祭礼伝承の努力をしています。森田さんも「まず長刀踊りの復活、次はすし切り、かんの舞など祭礼全体の魅力を子どもたちに伝えたい」と話していました。

令和5年最初の教室では、長刀踊りの衣装合わせが行われました。練習にも熱が入り、5月の「すし切り祭り」では教室の子どもたちが約60年ぶりに長刀踊りを復活させる予定です。